

---

# 闘争の渦【長期休載中】

朝倉 由那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闘争の渦【長期休載中】

### 【Zコード】

Z5494C

### 【作者名】

朝倉 由那

### 【あらすじ】

地球ではないどこかの世界。その世界では戦争が繰り返されていた。しかし、その戦争、我々の知る戦争とは大きく違っていた。その戦争とは魔術戦争。常人には不可解な力の戦争であつた。魔術師の前ではあらゆる兵器は無力と化し、魔術師の力がその国の戦力と同義であつた。魔術師の扱う魔術カードと呼ばれる宝具。そして、二人の戦士。幾重にもかみ合つた歯車が動きだす。力は力を呼び、闘争の渦を生み出していく。異世界ファンタジー、ここに開幕。

申し訳ありませんが、現在は『魂ヲ喰ライシ者』（の方に力を入

れたいため、こちらの方はしばらく更新出来ません。なので無期限  
休載にさせて頂きます。作者の勝手で、本当に申し訳ありません。

## File · 00 「封印の魔剣」（前書き）

一重の想い～Double Will～の代わりに始まりました。作者の勝手でこのよつたな事態にしてしまって、本当に申し訳ありません。

割と書ける方だと自負しているファンタジーもので腕を磨いていこうと思います。まだまだ稚拙で幼稚な小説ですが温かい目で見守つていただければ幸いです。

「よつこりせつと…… 我ながらジジくさいな  
箱にしまわれた大量の本を床に置くと、膨大な量の埃が舞い上が  
り視界を覆う。何年もの間、手入れもせず放つておいたのだから当  
然と言えば当然のことである。彼が片づけに苦労しているのは理不  
尽でも何でもなく因果応報なのだ。

「全く、ジイちゃんもこんな沢山、本をため込まなくともいいのに  
今は亡き祖父にどうしようもない文句を垂れる青年。

彼が片づけに奔走する書物、物品の数々は、元々は彼の所有物で  
はなく祖父の遺していった遺産、またの名をガラクタと言つ。彼に  
とつては無用の長物であり、この先必要になることもないだろう、  
と考えていた。しかし、仮にも祖父の忘れ形見だ、片づけぐらいは  
しておこうと考え、長い旅立ちを前にして倉庫の片づけに精を出し  
ていた。

「……【精霊と属性についての考察】……【伝説の魔物と聖獣  
の生態】……【歴戦の魔術師たち】……パティに見せたら喜び  
そうな本ばかりだね」タイトルを眺めながら彼は呟く。普段、読書  
などはあまりしない彼にとって縁も所縁もないその品々、それを開  
いて乾燥した羊皮紙に綴られた漆黒の文字を眺める事は頭痛を呼び  
起こすだけである。

「どうか、三歳も年下なのに、いつも差がでると男としては情  
けないような気がする……」

あまりにもよくできている血縁を思い出し、懐かしい記憶に意識  
を傾けつつも手の動きを止めない。出発は近いのに片づけはサッパ  
リ進行していない。彼の手際が悪いのか、はたまた、祖父の倉庫に  
は散乱の魔術でもかけられているのか。無論、片づけがサッパリ進  
まないのは彼の責任である。既に休憩をとった回数は彼自身も覚え  
ていない。

「……パーティ、元気にしてるかな？」

幼き日々の記憶が脳裏を掠めては去つていき、彼の意識を幼少時代の風景へと誘うがそれを振り払う。出発の期限は待つてはくれず、また彼を急かす者も今はいない。自身を急かさねば大変な事になつてしまふのは彼自身がよく知つていた。

「えへつと、この壺は……ここでいいか。この角笛は、この箱の中か」祖父の遺した品々は、全てが本のよう片付けやすい代物であるはずがなく、壺や椅子、胸像などといったかさばる物も多々保存されていた。

「……うわつ、何で鹿の剥製なんかがあるんだ？」

彼はこのような品々を既に一週間ほど片づけている。けれど、片づけようが逆立ちしようが終わりは一向に見えてこない。今まで少しも整理してこなかつた過去の自分に無駄な呪詛を投げかけながら黙々と手を動かす。埃と煤で真つ黒になつた彼の手は普段使つていない部位も活用しているため、些か筋肉痛に陥つている。

「まったく、ジイちゃんもつまらない物を遺してくれたよ。僕だつてこんな物いらないのにな」祖父の遺した遺産の数々を整理しながら呟く。広い倉庫だが、物と埃で溢れ返つているため声は反響せず、吸い込まれて消えていった。

「……せめて、戦争で役に立つ……物でもあればな」

“力が望む者よ、我を欲するか”

「へ？」

彼は振り返る。しかし、そこには誰もいなくあるのはガラクタばかりだつた。完全に人の気配が無かつたため、彼も気のせいだと考えた。この世界において見えざる存在は恐怖の対象ではなく、また見えざる存在がいたら気配で分かる程度には世界の住人も感覚が磨かれている。

「氣のせい、か」人の氣配は完全に無い。人どころか、ネズミ一匹の氣配すらない。

“ 我が力を望む者よ、ルーファウス・グランドリオンの血を引く者よ。汝の願い、我が叶えよう”

「うえ？」再び振り向く。完全に空耳ではない。しかし、相変わらず人の氣配ばぜ口である。彼の氣配を読む力は割と良い方だ。それは彼の周囲にいる優秀な人物たちのお墨付きだ。

そして、その何かは彼の祖父であるルーファウス・グランドリオンの名を知っている。その言葉が彼から恐怖をぬぐい取る。その名は彼に力と勇気を与えてくれるものであつたからだ。

「だ、誰かいいるのか？」そこにいる存在が『人』でない事は彼の直感が告げていた。それでも、そこに在る存在は彼が解する事のできる言語を発している。ならば、声をかければ返事が返つてくるだろうと考へた。

“ 我は封印の魔剣・レー・ヴァテインなり。我が力を欲する者よ、我が封印を解き放て”

「封印の……魔剣？」声の聞こえてくる方を眺める。彼の祖父が遺した遺産に混じつてキラリと光る物が彼の眼に飛び込んできた。

そこにあるのは、紛れもなく剣であった。重い品々が上にのしかつていたが、その刀身は一ミリもしならずにピンとしている。大人の男一人が片手で操るには十分な長さを持っている片手剣であった。

「こんな剣、あつたつけ？」剣を拾い上げて両手に持つ。

“ 我が力を欲する者よ、封印を解くがよい”

「ふ、封印つて言つても、僕は魔術も何も使えないのに…………」

慌てて剣をひっくり返す。しかし、そこには何も無く表の傷一つない刀身と全く同じ面が輝いていた。柄の先に深紅の宝石が埋め込まれ、柄は片手で持つには十分だが両手で持つには足りない長さである。

“我に続いて呪文を唱えるがよい。もし汝に我を扱う資格、力が備わっているのならば、言葉は自然と力を帯びる…………『混沌の力を秘めし剣よ』”

剣から発せられるこの後半部分の口調が低くなる。彼はそこから繰り返すのだと解釈した。

「二」混沌の力を秘めし剣よ…………」彼は素直に剣の発する声を繰り返す。

“『陽の光は我が心の輝き、陰の影は我が心の暗がり』…………”

「陽の光は、我が心の輝き、い、陰の影は、我が心の暗がり…………」  
彼は剣の言葉を忠実に繰り返していく。

言葉自体はいたつてシンプルであるが、一言唱えることに内から奇妙な力が溢れ返り、もう一言唱えるとその力が渦となる。

“その身に宿りし真正の力、我が身に宿るはその派生”

“その身に宿りし真正の力、我が身に宿るはその派生…………”

“ここに、我是汝と契約を結び、汝を戒めし封印を解放する”

“ここに、我是汝と契約を結び、汝を戒めし封印を解放する…………”

“封印の魔剣よ、我が呼びかけに応え、真の姿を我の前へ示せ”

“封印の魔剣よ、我が呼びかけに応え、真の姿を我の前へ示せ…………”

「……」

一つの言葉を紡ぐと同時に、一つの力が彼の中に渦巻く。一つの言葉を紡ぐと、一つの力が彼の全身を駆け巡った。

一言、その力が内より溢れ返る。

二言、その力が彼という器の中で渦巻き広がる。

三言、その力の渦は彼の内から外へと向けて方向を変える。

四言、その流れは彼の全身を奔走し、彼の意識を力へと萃めていく。  
五言、その力の奔流は彼を魅せながら、封印を解くべくして刃へと萃まつていく。

“汝との契約、ここに完了す。真正の魔術剣・レーヴァテインよ。  
長き眠りから目覚めよ！”

「汝との契約、ここに完了す。真正の魔術剣・レーヴァテインよ…

……長き眠りから目覚めよ！」

六言、最後の詠唱と共に莫大な力の奔流が剣を通して、現生へと具現化した……

File 00 「封印の魔剣」

著者：ユナ・アサクラ

「警告！ 魔術師一個師団が目前まで迫っています。…………くそつ！ 」 いっぽはレーダーを無効化してる。盾使いが一人は確實にいます！ モニターの前で叫びだす賢そうな顔立ちの男。耳にかけた通信機で様々な分隊に現状の報告を急いでいる。

報告自体は些か以上に危機が迫っている事を現しているが、彼を含め、その場のほとんど全員は慌てていない。

「おい、盾のカードにはどれだけの魔力を込めればあらゆる干渉をシャットダウンできるんだ？」 彼は隣に立つ可憐な少女に尋ねる。と言つても、少女と言つには些か以上に大人びているのだが。

「…………最低二万八千五十四」 少女が少々考え込みながら答える。 「大した魔術師でもねえな。せいぜい A A + つてところだろ」 彼は首を鳴らしながら咳く。

彼の言葉に周りの者は表情を変化させる。ある者は畏怖の表情を浮かべる。ある者は尊敬の眼差し。そして、またある者は嫉妬の視線を。彼はそのように様々な表情を自分に向けられるのは慣れていたため、特に気にかける事もなくモニタを眺める。

「つたく、あそこはエーリンの管轄だろ？ また飯でも食いに行くつてんのか？」

「彼女は今日非番」

肩を竦める彼と、淡々と答える彼女。目の前で様々な色で目まぐるしく点滅するモニタは揃つて【警告】の文字を表示して、自らを操る人間に迫りくる危機を告げている。

しかし、誰も行動を起こさない。なぜならば、そこにいるほとんど全員が現在起こっている事態を危機とは感じていないからである。危機とは、自らの命、及び仲間、自らの所属する組織の存在がこの世から消し去られても不思議ではない状況の事である。そこにいる

全員にとつて、現在はそのいずれにも当てはまらない。

「ヴァレンタインよ。今からでも行けるか？」その場でモータを見つめる人間の中でも一際高い位置にその席を設けていた初老の男性が彼に言葉を投げかける。

「分かりきつてる事聞くなよ、国王さん」彼は軽く返事をすると、腰に下げた革製の特殊な入れ物に手を当てる。

「エラーのカードばかりつかつてると椎間板ヘルニアになる」それは、足腰を使わないと体に悪いという事なのだろうか。無論、そんな冗談を真に受ける彼でもないし、それを少女もしつかり把握している。

「王国軍率いる【白銀の鬼神】が椎間板ヘルニアなんかで倒れた曉には皇國軍のお偉いさんはぶつ倒れちまうな」

「仮にも【エース オブ ザ カード】の異名を持つんだ。そんな病気じや倒れないさ」

彼の周囲の同僚もそれを分かつてゐるため、冗談を冗談として受け止めてゐる。もはや、現状が一般的に見れば危機的状況であることをその場の全員が忘れ去つてゐる。

「つむせえよ。俺だつてカゼは引くし、怪我もする」彼はその白銀の髪を靡かせながら、背中に下げた得物を抜き放つ。彼のみが操る事のできるとされる強力な宝具、壊滅の神槍・グングニルを。

「それにしても今日はよく喋るな。なんか悪いもんでも食つたか？」

「…………今朝の牛乳は賞味期限切れ」  
「…………腹壊すんじやねえぞ、レミィ」

彼らはほんの短い間で互いの意志の疎通を感じる。彼にとつても少女にとつても二人の長い付き合いからすればその一瞬で互いの考えなど簡単に読み取れるのだ。

“空よ、我が存在をその流れに委ね転移させよ！”

「じゃ、行つてくる。…………ニアーーー！」

## 【H】

その言葉と共に彼の周囲に強力な流れが渦巻き、一陣の風が彼を別座標に転移させた。

「ヴァレンタインさん！ 急いでください…… もう皇國軍はそこまで迫つてきています！！」

「到着早々うるせえよ」彼は、耳元に放たれた不意打ちにクラクラしながら眩いだ。王國軍一の魔術師とは言え、鼓膜に直接攻撃を放たれたら一撃必殺レベルのダメージを受けてしまう。

「ですが、既に皇國軍の一般兵は我が軍と戦闘を始めております！ 上級魔術師は敵軍の後列で待機しておりますがもうじきに進行を開始するものと思われます！」

「だからうるせえって」部下の報告する現状を右から左へと聞き流している彼。そんな彼の様子を見ながら部下の方はイライラしている。

「ですが……」

「あ～、分かった。今すぐやれば良いんだろ？」

部下の焦り具合に嫌気がさしてきた彼はグングニルを構え腰から紙片を一枚抜き出す。

「敵は広範囲に渡つて広がっています！ 並なカードではどうしようもないですよ！ 何のカードを使うんですか？」

「俺を誰だと思つてるんだよ？ まあ見てるつて」彼は小さく構えると手に持つた紙片を一枚合わせ、槍の穂先に重ねる。刹那。グングニルが光を放ち、漆黒に変色した。

「ダブルマジック  
二重魔術！！」

“水よ、全ての願いを精靈、ウェンディーネの名の下に集め、万物を清める清流の流動を呼び出せ！我が同胞を襲いし宿敵を清めの流れで薙ぎ払え！”

通常では唱える事すら難関とされる超高位魔術の詠唱分を一気に読み解く彼。その域はもはや人のそれを脱しており、異名の【白銀の鬼神】というのもあながち間違いではないのかもしない。

「くらえ！一撃必殺！！ ウェンディーネ・スプラッシュ！…」

【精靈水】  
ウェンディーネ・スプラッシュ

詠唱と共に高まる魔力を紡ぎ合わせ、周囲に放出する。解放された魔力エネルギーは槍の穂先に浮かぶ紙片を通して透き通る水流へと変換された。常人には理解できない程の膨大な力が一瞬で広範囲に広がっていき、水流に込められたエネルギーが圧縮される。

「す、凄いです、ヴァレンタインさん…！」

上官の発動させた力の膨大さに驚愕し、尊敬の眼差しを向ける一般兵士。その力の強大さは遙か雲の上、と形容してもまだ足りない程の力である。

「…………いや」

「へ？」彼の言葉に首を傾げる一般兵。

“万物の因果を断ち切り、我が身体を守護せよ！”

「止められた」彼は槍を構えると、水流の行き先を見る。そこには一人の少女であつた。

「シールド！…」

## 【シールド】

強大なエネルギーが展開され、少女の前に充満する。その力は強固な壁となり、盾として少女を守護する。

「まさか、ヴァレンタインさんの精霊魔術を？」一般兵が驚愕と共に少女を見る。

少女の展開させたシールドは彼の放った膨大なエネルギーを秘めた水流を真正面から受けて、そして弾き飛ばした。それでも、彼の水流は有り余るエネルギーを周囲に放出し、少女以外の兵を押し流し吹き飛ばしていく。

「ちつ！」彼は槍を構えると跳躍し、少女へと一気に迫る。

「くつ！？」少女は後ろへと跳躍し、槍の一閃を紙一重で避ける。

「遅い！？」彼は回避不可能とも言われる超絶な槍捌きで神速の斬

撃を放つ。

「二重魔術、ディフェンス！」命中、いや、即死は避けられない

と判断した少女は紙片を一枚重ね周囲に力を展開させた。

## 【守護】

ガキイイ！！

「！？」彼は自らの目を疑う。彼の持つ宝具、壊滅の神槍はその名の通り『破壊』と『滅却』を導く神の力を秘めし槍である。半端な防御など熱したナイフをバターに入れるよりも低い抵抗で切り裂く。それを、この少女は止めた。彼が今まで出会った事のないほどの力で。

「一重魔術を無声詠唱、か。…………面白い。お前、名前は？」

「…………パトリシア・グランドリオン。あなたは、エドワード・ヴァレンタインね」

強者の持つ勘が告げていた。生半可な気持ちでは一瞬で殺られる

と。その勘は強者が強者であるが故の勘であり、幾度にまで重ねた戦闘で磨かれたその直感は外れる事がほとんどない。

「……グランドリオン、行け。いざれまた会おう」彼、エドワードは槍を下ろし、彼女に背中を向ける。その言葉は本物であり、異ではない。

「そうね。お互い、準備を整えてからやり合いましょうか」少女は紙片をしまつと、彼に背を向ける。お互に分かつていて、相手の言葉が偽りでは無い事を。

「ヴァレンタインさん！ どうして逃がしたんですか！？」いきさつを見ていた一般兵が尋ねる。その兵も彼と少女の間に立ちこめた不可視の力になす術がなかつたのであるが。

「逃がしたんじやない。逃がしてもらつた。……今の状態なら殺られていたかもしねない」

彼は振り返る。少女は既に遠くへと転送しており、その姿は無かつた。

「ヴァ、ヴァレンタインさんが負けるはずないじやないですか」「本当にそう思つのか？」

彼が追及する。その瞳は本氣であり、皇国軍一の戦士が発した勝利以外の言葉を初めて聞いた一般兵は、何も言つ事が出来なかつた。

「パトリシア・グランドリオン。ルーファウス・グランドリオンの孫か」

彼は戦場を後にする。既に戦いは終わつていた。彼の放つた水流は少女以外の人間全てを薙ぎ払い、その命を奪つていたのだ。

ということで始まります。魂ヲ喰ライシ者とは違ひ完全にシリアス一直線です。三人称なのでシリアルにしやすいです。ジャンルはファンタジーでもよかつたのですが、戦争を戦略などを通して書いて思つてるので戦記にさせてもらいました。ですが、内容はあくまでファンタジーです。

見ての通り、二つの流れを同じ時間軸で追つていきます。今回のように一話同時に投稿したり、片方ずつ投稿したりします。それは、今後とも応援していただけたら幸いです。

その日は快晴であった。彼の上官が言つては、風向きも良く絶好の交戦日和らしい。

「魔術戦争に良い日も悪い日もないと思うけどね」彼は誰に言つてもなく独り言を言つ。小声で呟いたため彼の周りにいる仲間は当然の如く彼には気を回さない。ただ一人、いや、ただ一振を除いては。

「そうは言つてもな。天候は戦況に大きく影響するぞ」

「僕はまだランクAにもなってないんだから、そんなの分からないよ」彼は、手に持つ剣から発せられる言葉に言い返す。

「そこまで腕を磨くんだな」

「…………遠距離班！！一気に攻めるわよ！ 属性魔術用意！」

剣の言葉が終わつたのと同時に、凜とした声で軍に指示が出される。彼の聞き慣れたその声は、戦場では上司のそれに違ひなく、彼も氣を引き締める。

「おい、お前は行かなくて良いのか？」

「僕は一列目。一発目が撃たれたら僕の番だよ」

軍の前線に強力な歴戦の強者達が集まつていくのを眺めながら囁き交わす。様々な順境、逆境を切り抜けて来たAAA<sup>トリプルA</sup>の魔術師達が一斉に構える。そこに渦巻く流れは一般兵にですら感じ取れるほどの強力なものである。仮にも魔術師である彼はその力を最大限に感じており、知らずにして戦慄を感じていた。

「レイ、伏せてろ。さすがにこの規模じや衝撃も半端ないだろ」

不意に発せられた剣の言葉に軽く頷くレイと呼ばれた青年。

「…………！？ レヴィ…………この感じ…………」

「ああ、間違いない。王国軍にオーバーS…………いや、S+は超え

てる。まずいな…………」

レイの言葉に肯定の返事をするレビィと呼ばれた剣。先程までの落ち着いた様子とは打って変わり、些か危惧を感じさせる口調となつている。

「パーティ！ パティ！」 レイが軍の先頭に向かつて声をかける。そこには軽い鎧を纏い前を見通す少女が立つていた。その少女は振り返ると凛とした言葉を返す。

「ここでは『グラーリオン指揮官』と呼ぶ事になつてゐるはずよ。レイ・グラーリオン君」

その少女はまだ幼さの残る外見とは違い、非常に大人びた態度で応えた。

「そんな事言つてゐる場合じやないよ。王国軍にオーバーSの魔術師が転送して來たんだ！」

「オーバーS？ ……私は感じないわよ」 レイの言葉に首を傾げるパーティと呼ばれた少女。彼女の周囲の魔術師も頷いている。

「間違いないつて！ 僕もレー・ヴァーテインも感じてるんだよー！」

「大丈夫よ。オーバーSだらうと属性魔術の集中発動には勝てないわ」

レイの警告を軽く流すパーティ。レイは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「総員……詠唱！」

膨大な数の言葉が次々と紡がれ、一種の喧騒となる。意味の分からぬ者がその言葉を聞いてもそれはただのざわめきに過ぎないが、意味の分かる者が、すなわち魔術師が聞いたのならばこれから起る事に冷や汗をかかざるを得ないだろう。

「…………レイ！ まずい！ シールドだ！」 突如、剣が声を上げる。

「シールド？ まさかこれだけの属性魔術をそれだけで防ぐ気？」

「そのまさかだ。他のカードは使われてない」  
レイの言葉に肯定する剣。普通ならばありえないその事態に恐怖  
までも感じるレイ。

「解き放て！」

パティの声が響き渡り、軍全体に伝わる。それは紛れも無く破壊の前兆に他ならないため、ほとんどの人間が一斉に後方まで退く。次の瞬間、凝縮された力が見えざる存在から見え得る存在に変換された。具現化された幻想が風、火、水、地、すなわち四大元素へと姿を変えて放たれた。

「もらつたわよ！」パティが衝撃を耐えながら前方を見据え、聞こえてくるであろう爆音を待つ。

一秒、期待の眼差しで見つめている。

一秒、立ち上るであろう業火を待ち構える。

三秒、少し長い間に眉を潜める。

四秒、長すぎる間に不安を隠せなくなる。

そして五秒、現れた力に驚愕する。

「ちよつ、な、何なの？ なんで何も起こらないの？ それにこの魔力……」

「間違いなく精霊魔術だな」

パティの言葉を引き継ぐレー・ヴァテイン。パティ、レー・ヴァテイン、そして、剣を握りしめるレイの全員が前方から発せられる強大

なを感じとる。まず口を開いたのはレイだった。

「……パーティ、エラーのカード使ってできるだけ大人数で逃げて」「えっ？」

「早く逃げて！ 僕が負けても大丈夫なように！」「レイがレー・ヴァテインを構えて腰に右手を当てる。

「何をする気だ、レイ？」

「……サラマンドラ・ブレイズで対抗する」「なっ！？ レイ、正気なの？」

レイの返答に田を見開くパーティ。この世界の常識から考えればそれは確かに正気の沙汰とは思えない。

「……行くぞ、レイ」

しかし、物事には確実に例外が存在する。この場合、例外はレイ、そしてレー・ヴァテインである。

「頼んだよ、パーティ」

そう言い残して走り出す。彼自身が良かれと思つ事を成し遂げるために。

「いくよ、レビィ！」

「いつでもいいぞ」

軍部の最前線まで走り、前方を見据える。渦巻く力はまだ変換されてはいなかつた。しかし、それも時間の問題である。

「レイ、時間が無い。もう始めるぞ」

「うん！ 一気に行くよーー！」

少ない言葉で意思を疎通させている。一を聞いて十を知る、とは

この事である。

「ダブルマジック

「二重魔術！－！」

“炎よ、我が心の輝きと共に、精靈の名の下に、紅蓮の奔流を呼び起こし……”

レイは眼を閉じ、レー・ヴァ・テインの刀身に一枚の紙片を当てる。口から紡ぎ出される言葉は普段のそれとは異なっていた。

「レイ！ 来るぞ！！」

膨大な力の解放を感じとつたレー・ヴァ・テインがレイに忠告する。しかし、実際その必要が無い事はレイもレー・ヴァ・テインも承知していた。レイもその発動を確かに感じていたのだから。

“ 我が前に立つ存在を灼熱の劫火にて薙ぎ払え！”

「行くよ！ ……サラマンドラ・ブレイズ！！」

【精靈炎】  
サラマンドラ・ブレイズ

その言葉は地獄の業火を呼び出す呪文にして、同時に清らかな聖火を生み出す詠唱であった。解放された力は紅蓮の劫火であり、破壊の爆発。

灼熱の爆炎を携え、無を導くその力は、詠唱通りに精靈サラマンダーの御名のもとにレイの力を糧に成長し、カードの呪縛から解き放たれる。

「こりやあ…………マズイ！ ノーマ・アースクエイクだ！」

レーヴァ・テインが苦しげな声を上げる。向かい来る強大な力を正確に感じ取り、危機感を胸の中に生まれさせる。

「ノーム…………地属性か」自らの放つた火炎を見守るレイの目にも映つた。大地からほとばしる、怒涛の如き岩石の噴出を。

「つ、強すぎるよ！」

「レイ、逃げるぞ！！」

自らの業火の勝つ見込みが零であると判断したレイとレー・ヴァ・テインは一瞬で逃げを選択する。

“空よ、……”

「ダメだ！ 間に合わない……」レイの詠唱を遮つてレー・ヴァ・ティンの悲鳴が響き渡る。

しかし、その悲鳴すらも眩ゆい光に飲み込まれた……

File・No.1 「遭遇した強敵」

著者：ユナ・アサクラ

「ヴァレンタイン。準備はできたか？」

「見りや分かるだろ。まだだ」

巨大な液晶画面の前で彼が振り返りながらマントを纏う。服はとても軽装であるが、背中には巨大な槍が下がつていて一見しても穏便な用件での準備でない事は分かる。暗く、広い部屋の中において、最も武装しているのは彼である。

「まあいい。王国軍の射程範囲にもこちらはまだ入っていない。時間はまだ少しある」偉ぶつた初老の男が彼に告げる。

「作戦参謀。作戦はどうなつていてるのだ？」偉ぶつた男よりもさらに偉そうな男が先ほどの男に尋ねる。その男は広い部屋の中で最も高い位置に椅子を構えていて、液晶画面を眺めながらあれこれと考えている。

「ヴァレンタインが王国軍の魔術を防ぎ、精靈魔術を一撃叩き込みます。その後に一気に一般兵が攻め入ります。そうすれば最も近いビスターの街を攻め落とせます、国王」作戦参謀が高座の男に答える。「またまた人任せな作戦だこと」ヴァレンタインと呼ばれた男がため息交じりに答える。

「……的確かつ確実な作戦」

今まで彼の隣にいながら一言も喋らず、微動だにしていなかつた少女が口を開いた。

「うるせえよ。俺がいないと勝てないのかよ」彼は完全に呆れて言う。

「お喋りはもういい。ヴァレンタイン、行け。敵の射程にもう入るぞ」国王の厳かな命令が下された。その命令に逆らえるのはこの王国にはおらず、逆らおうとする人間もまた、この国にはいなかつた。「じゃ、行つてくらあ。レミィ、こっちは任せたぞ」

「……氣をつけて」レミィと呼ばれた少女が軽く頷いた。

“空よ、我が存在をその流れに委ね転移をせよ！”

彼は腰の入れ物から一枚の紙片を取り出しながら、グングール壊滅の神槍を構える。

「……エアー！！」

【空】

不可視の力の流れに彼は身を任せる。その流れは一陣の風となり、その風は場所と場所を繋ぐ扉となり、彼の存在を運ぶ。

（とある平原）

「ヴァレンタインさん！！ もう魔術師が詠唱準備に入っています！」

「……だから、うつせえんだよ！！」

風の隙間から現れた瞬間、耳元に爆音が叩き込まれた。彼は獣でも化け物でもない。人である以上、耳に直接大声を叩き込まれたら当然頭に相当なダメージが送られる。

「ですが！ この力は間違いなく属性魔術です！！」

「だあかあらあ！ 黙つて見てりやいいんだよ！！」 怒鳴つて言い返す。その怒鳴り声は一般兵にとつては上官のそれであり、歯向かつたら下手したら首が飛んでしまうのだ。彼はそんな人間ではないのだが、兵を黙らせる力を十分に持っている。

「は、ハイイ！！」 一般兵は一言だけ返すと頭を下げる。

「……来たな」 彼は腰から紙片を取り出す。

「……この規模は……一十発は超えますよ……」

「だから、黙つて見とけつってんだよ……」彼は眼を閉じて槍を構えた。

“ 我を縛る全因果を跳ねのけ、神秘の加護をもたらせ！ ”

彼の周囲に神秘の力が流れ、そこに万物を否定する強固な守りをもたらす。

「…………シールド……！」

【シールド】

「で、ですが…………」兵は口出ししようとしたが、彼に睨まれて口を閉じる。彼が大丈夫と言う時は大丈夫なのである。例え、シールド一枚だろうと全て防いでくれる、そう信じる事にした兵であった。「来な…………止めてやるぜ！」彼は手を不可視の壁に沿え、来たる魔術の大群に供える。

次の瞬間、彼らの視界に強烈な光の山が現れた。それは疾風、業火、激流、岩石が徒党を組んで彼らを焼き、潰し、砕き、消し去ろうとしている。

「ウインド、ファイア、アクア、アース…………たつたこの規模の軍相手に大げさだな」彼は苦笑するとグングニルで自らの体を支える。あくまで氣休めであり、そんな事をせずとも大丈夫だと彼は絶対の自信を持つていた。

光が炸裂した。四元素の山が、彼の張るシールドに衝突し強烈な相反の力がはたらく。その元素の山の力は通常ならば阻む事は不可能なほど大きさである。しかし、彼はそれをシールド一枚、片腕一本で食いとめている。

「…………っ！」彼は力を僅かに入れる。その途端、全てのエレメン

トが霧散し、消え去った。

「す、凄い…………」一般兵は感嘆の呟きを漏らした。

そして、彼は腰から紙片を取り出す。『地』と書かれ、多彩な色彩で描かれた様々な文様は瓜二つのものであった。

「さて…………もう終わらせるか」彼は強烈な力を展開させる。その力はもはや人の理解の範疇を軽く超越するものであり、その強大さに一般兵は思わず一步後ずさつっていた。

“地よ、全ての想いを精霊、ノームの名の下に集わせ、万物を打ち碎く大地の怒涛を！”

その言の葉に秘められた不可解な力、力と言葉の織り合わされた耽美な響きは人の理解の範疇を軽く超越している。その響きはカーデを通り、大地の怒りへと変換される。

「いぐぞ、ノームの力を見せてやれ！ ノーマ・アースクエイク！」

「！」

【精霊地】  
ノーマ・アースクエイク

膨大な力が圧縮され、折りたたまれ、そして展開される。力の波動は空間そのものを歪ませるほど強大なものであり、歪みを生みだし因果に断絶をもたらす。

「はあっ！！」彼の一聲と共に、大地の怒涛が音を立てて一直線に放たれる。

その瞬間、一つの痛みが彼の胸をよぎる。

「くつ…………！」忌々しげに咳くとその痛みを無視する。

地の怒涛はもの凄い速さで皇國軍に迫っていく。もはやその力の流れを止める事ができるのは彼しかいないはずであった。

「つっ！…？」彼は驚愕の声を隠さずに上げた。

彼は敏感に感じ取った。強大な、自らの魔力に対抗できるだけの力の発現を感じ取った。

「まさかっ！？」力の響きが一瞬で彼の元へと届く。力の波紋は波打ち、彼が今まで出会った事、見た事も無いほど兵力を秘めていた。

「俺の魔術が！？」何が起こりうるのか、今、何が起こりうとしているのか彼は完全に理解していた。

よつて、恐怖した。自らを打ち破るやもしかぬ力の到来に。

「破られる、だと！？」自らの放った魔術がその瞬間、初めて敗北の一文字を見る事になつた事を知つた。

彼が強者故にそこで決めた。初の逃亡を決める事を。

「……エアーを使え！」彼は大音声で支持を出した。

彼が兵の頭である以上、その命は可能な限り救わなければならぬい。

「早く！ 魔術師はエアーで退却だ！ 急げ！！」支持を繰り返す。始め、支持を理解できなかつた魔術師達は即座に指示に従い始めた。姿が次々と消えていく。

彼はここで一旦、無駄なプライドを全て捨てた。ここでそのプライドを捨てられるが故の強者であり、彼も紙片を一枚取り出した。  
「……仕方ねえ。くつ……逃げるしか……」彼は忌々しげに呟いた。

“空よ、我が存在をその流れに委ね転移させよ！”

「……エアー！」力を展開し、彼は自らとその周囲の人間を包み込んだ。

### 【<sup>ア</sup>空】

一瞬の風が吹き、彼とその周囲の人間を巻き込み、力の狭間へとねじ込んだ。空間の歪みを利用し、存在そのものを別座標へと転移させた。

そこに残つたのは、運びきれなかつた人間と、雪崩のよつに訪れた膨大な魔力だけであつた。

File · I 「初めての脅威」

著者：ユナ・アサクラ

## File · I 「出現した脅威」（後書き）

どうも、かなり久しぶりになつてしましました。申し訳ありません。最近では小説の執筆を手掛けるのが珍しいくらい忙しい毎日です。

今回も一話同時投稿です。まあ、キングダム－THE COMのソ編とり、編を同時にプレイして感じる感じでしょうか？…………はい、訳分かりません。

次回がいつになるかはわかりませんが、楽しみにしていただいたら幸いです。感想もいただけたら嬉しいです。

## File・II 「異能の力」

（医務室）

「うう…………く…………ああ！」

そこは清潔なイメージを受ける白を基調とした大部屋であった。わずかながら、消毒薬の独特な香りや殺菌するための薬品の匂いが立ち込めていた。

「ん…………あうう…………んんっ」

並べられたベッドにかけられたシーツは清潔そのもので、負傷者を受け入れる準備はいくらでもできていた。隣の部屋では医療担当者が交代制で常に待機。何の問題も無い完璧な設備だ。

「…………く、あああ！…………んん、うう」

しかし、珍しい事にこの時に広い医務室にいた人間は一人だけであつた。人ならざる存在をも含めれば一人と一振であるが、この際、そんな事は些細な問題に過ぎなかつた。

「…………お兄ちゃん！　お兄ちゃん！」

そんながら空きの医務室に声が響き渡つてゐる。その声は当然そこにある人間の発するものであり、男声女声一つずつであつた。

「…………うう、んん…………ああああああ！」

「どうしました！？」

男の咆哮、もとい悲鳴を聞き取つた恰幅のよい看護婦が慌てて医務室内に入つて來た。そこで看護婦が眼にした光景は……

「あつ、すみません。彼がうなされて大声を出してしまつて」

皇國軍特級魔術師にして大尉魔術師であるパトリシア・グランドリオンが、汗だくになり目を見開いている男の肩を押さえていた。

男は大地震に飲み込まれる悪夢から既に解放されていた。

「無理もないわねえ。エドワード・ヴァレンタインの精靈魔術を真っ正面から受けたんですものねえ」

「私も驚きましたよ。本当に生きててよかったです」「看護婦の言葉にしみじみと頷くパトリシア。その瞳には深い慈愛が刻み込まれていた。

「ハアハア……ぱ、パティ……ここは？」 ようやく落ち着いた男が胸を押さえながら隣の少女に尋ねる。

「皇国軍本部の医務室。お兄ちゃん、丸一日寝込んでたのよ」

「丸一日……そうか。僕はノーマ・アースクエイクに押し負けて

……」

頭を軽く押さえ、うつすらと残る曖昧な記憶を辿りながらレイ・グラントリオンは呟く。

「やつぱり分かってねえか」

その時、その場にいる誰のものでもない声が響き渡った。その声はそこにある一振の剣から発せられていた。

「分かつてない、つて何の事？」 レイは、自らの武器にして大切な相棒、封印の魔剣・レー・ヴァテインに尋ねる。

「それは、私達から説明しよう」

突然、扉が静かに開き、一人の初老の男性が入って来た。その姿を眼から取り込み、それが誰かを認識するのに幾刹那。次の瞬間にはレイとパトリシアは眼を大きく見開いて頭を下げた。

「こ、こここ、皇帝！？」

「何故このような所に！？」

その男は皇帝、リオファネス・オルティランその人であり、レイとパトリシアにとつては自分の国の元首である。

「頭を上げてくれ。君達の事はよく聞いているよ」

長い時の流れと幾度もの戦闘の中で研摩された穏やか、かつ莊厳な物腰で二人に告げる。

「私達の事を、ですか？ 一体誰に……？」パトリシアは至極不思議そうな表情を浮かべる。

「……ジイちゃん、じゃなくて、祖父からですか？」

「そんなに固くならんでも良い。楽にしたまえ。……そう、我が戦友、ルーファウスに聞いたのだ」

緊張気味なレイとパトリシアに微笑みながら答えるリオファネス。その落ち着いた声は一人に安心感をもたらした。

「優秀な孫一人をよろしく、とな」

「そ、そんな優秀だなんて。私達はあくまで一般魔術師です」

「僕なんかBBランク+ごときです」

驚いて眼を開く二人。同じグランドリオンの血を引く従兄妹の反応は非常に似ていた。

同じグランドリオンの姓を持ち、お兄ちゃんと呼びつ呼ばれつする関係であるレイとパトリシアが赤の他人であるはずもない。二人は従兄妹であり、レイは十八歳、パトリシアは十五歳であるため、レイはパトリシアの兄のような存在である。ただ、戦場ではパトリシアが先輩であり、レイはパトリシアの部下である。

二人は戦争で幼い頃に両親を失つており、そんな二人を育てたのが祖父であり、皇国軍最強と讃えられた魔術師、ルーファウス・グランドリオンであった。

「いや……君が秘めた力はオーバーSランク、いやいや最低SSには値する」

一人分、新たに声が加わった。ちょうど医務室に入り、リオファネスの後ろに立つたところであった。

「ツ、ツカサさん！？ な、何故あなたまでここへ？」もはや驚愕故に失神しそうなパトリシア。

彼女の眼に映つていたのは、彼女の上官にして皇国軍を率いる大魔術師、ツカサ・オルディランであった。この皇国軍の将軍であり、SS+ものランクを持つ強力な魔術師だ。

ちなみに、魔術師のランクは戦闘技術と発動可能な魔術によって決められる魔術師の保有能力を表す数値である。

C～A、そしてSまであり、CとBはCCとBB、AとSはAAとSSSまである。また、全ランクには+ランクもあり、最低Cから最高SSS+の二十段階に分けられる。もつとも、C代の人間は魔術師として全く使えないため魔術師にはなるうとはせず、SS+に至つてはそのランクを得た魔術師は一人もいなかつた。実質、魔術師とはB～SSの範囲の人間である。

漆黒の髪を揺らしながら戦友であるパトリシアに微笑みかけた。

「君の強力な従兄を見に来たんだよ、パトリシアさん。エドワード・ヴァレンタインの精霊魔術を相殺させるほどのは、レイ・グランドリオン君」

ツカサはレイを見ながら優しく言つ。

「相殺？ 僕のサラマンドラ・ブレイズは押し負けたはずじゃ」レイは自分の現状を考えながら呟く。もし、自らの魔術が負けていいのならば 医務室の厄介になる事などないと考える。

「負けた、と言うのはあながち間違いではないよ。ただ、それだと『勝ち』がいなくなるだけだ」ツカサは三枚の紙片を懐から取り出し、レイに見せる。

「カードだ……」それを見たパトリシアが声を上げる。

「そう、君達もよく知る『魔術カード』。これについて、簡単に説明してくれないかな？」ツカサが三枚のカードをパトリシアに見せた。

カードには円が描かれ、常人には理解すら不可能な力を秘めた文字、ルーンがちりばめられている。直線、曲線、記号、文字は様々な紋様を生みだし、カードはさながら一つのキャンバスと化している。三枚それには異なる紋様が刻まれ、中心に『風』『炎』『水』と書かれている。

「魔術カードは、予めカードそのものに膨大な魔力を封印し、術者の魔術発動を補佐する宝具です」

パトリシアは『何故、今更そんな事をきくのか?』と些か疑問を感じながらもツカサの指示に従つ。

「カードそのものが生きた魔力を持つため、使用しても時間回復します。カードは全体で大きく『陽』と『陰』に分けられ、互いに相対する力を秘めています」

ツカサが示し、パトリシアが説明したもの。それこそが、レイ達魔術師を魔術師たらしめている宝具である。彼ら魔術師は魔術カードを媒介とし、秘められた魔力を解放することで異能の力を奮うのだ。

「そこはレイ君も知つてゐるね?」

パトリシアの言葉が終わると同時にツカサが尋ねる。

「はい。基礎は覚えています」レイは小さく頷く。彼もまた魔術師として軍に属するため、基礎知識はキチンと身につけている。

「じゃあ、同威力の魔術が真つ向からぶつかつたらどうなるか知つてるかい?」レイの返答に微笑みながら改めて尋ねるツカサ。

「えつ……と」レイは返答に詰まる。まだ教わつたことのないため当然である。

「場合により、二種類の反応が起こるんだ。すなわち、反発と中和。カードの持つ陰陽が同じ時は反発反応である『魔力暴発』、違う時は中和反応である『魔力相殺』が起こるんだ」

ツカサはかい摘まんで説明した。この反応はいわば磁石と同じである。極が一致すれば磁力は反発し、相反すれば引き付けあつ。『僕のサラマンドラ・ブレイズに、ノーマ・アースクエイクがぶつかった。だから……』

「同じ陽どうし。起きたのは魔力暴発よ」レイの言葉をパトリシアは引き継いだ。

「魔力暴発が起きたらどうなるの？」レイはパトリシアに尋ねる。

今、一番大事なのはそれである。

「反発した魔力は互いに共鳴し、威力を削りながら術者のもとに跳ね返る。つまり、サラマンドラ・ブレイズの分の力はレイ君に、ノーマ・アースクエイクはエドワード・ヴァレンタインのもとに弾き返されたんだ」

「エドワード・ヴァレンタイン…………その人があの魔術を…………」レイはツカサの言葉を受けて呟く。エドワード・ヴァレンタインがSSSランクの王国だけでなく世界的にも最強の魔術師である事はレイも知っていた。

「…………ん？ 魔力暴発で反発した魔力はどうなったんですか？」レイはふと気付いた。

自分に身体的な外傷は全く見られない。レイが気絶したのはあくまで魔力の使いすぎである。つまり放たれた魔力はレイの限界に近い量。レイにはそれだけの魔力が霧散するとは到底思えなかつた。

「…………魔力暴発で弾かれた魔力が術者にダメージを与える事はない。だけど、その周りの人間なら話は別なんだ」ツカサは遠回しに言つ。

「術者を避けた魔力はその場にあるものを全て薙ぎ払う。それが魔力暴発なの」パトリシアはツカサの言葉をやや補う。

レイは既に察していた。自分の魔力が何をもたらしたのか。

「つまり…………僕のせいで何人も死んでしまったんですね」行き場を見失ったサラマンドラ・ブレイズの魔力はその場にある全てのものを薙ぎ払い、そして消え去つた。レイの跳ね返された魔力は周囲の人間の命を一瞬で奪つたのだ。

「それは違う」ツカサはキッカリと言い切つた。レイはゆっくりと顔を上げる。

「むしろレイ君のお陰で被害は桁違いに縮小されたんだよ。パトリシア君にエアーのカードを使わせて、多くの人を避難させた」

ツカサは『空』と書かれたカードを見せる。空間を操作する力を

秘めたそのカードは、人を瞬間移動させたりする力を持つ。

「そして、ノーマ・アースクエイクを反発させて魔力を大きく削つた。こちらが受けたダメージは本来受けるはずだった十分の一も無い上、王国側にこちら以上の損害を与えた」リオファネスが続ける。サラマンドラ・ブレイズとノーマ・アースクエイクが反発した以上、敵側にも同等の魔力が跳ね返ったはずなのだ。

「はあ……」レイは小さく答えた。

レイは些か煮え切らない想いだつた。咄嗟の事だつたとはいえ、自らの放つた魔術が人の命を多く奪つた。戦争とはいえ、レイはまだその感覚に慣れていなかつた。

「レイ君が気に病む必要は無い。確かに君の魔術は多少の命を奪つた。だけど、それの何倍もの命を君は救つたんだから」

意氣消沈しているレイにツカサは優しく告げる。その言葉でレイは幾分かの元気を取り戻した。

「はい。ありがとうございます」

「…………君はルーファウス君によく似てゐるな」突如、リオファネスがレイに言う。

「僕が…………祖父ですか？」レイは首を傾げる。今までそのように言われた事はなかつた。

「ああ。よく、似てゐる」何かを思い出すようにリオファネスは優しく呟いた。

レイは色々な事に気を取られまだ氣付いていなかつた。自分が先の戦闘でどれほどの事をしたのかを。そして、それが自分に何をもたらすのかを……

（戦技訓練所）

「くそつ！－」風を斬る音と共に神速の槍が放たれる。魔力の生み出した訓練用のターゲットは木つ端微塵に砕け散る。

“雷よ、その光の刃で全ての罪を薙ぎ払え！”

手の槍に一枚の魔術カードを沿えながらかなりの速さで詠唱する。

「轟け！サンダー！！」

彼の声と共に魔力が溢れ出し、カードを通して世界へと具現化する。

### 【雷】サンダー

閃光が炸裂し、剛雷がターゲットに叩き込まれる。強烈な電圧はその物体を一瞬で爆碎し、溢れ出た電流は辺りに放電する。落雷の衝撃波は周囲のターゲットを根こそぎにし、吹き飛ばす。

「ハアハアハア…………」強烈な魔術を使ったのにも関わらず、彼の身体の内外に大きな変化は見られない。その魔力、体力、そして胸にこべりつく苛立ち。

「何だ！ 誰なんだ！ 僕の前に立ち塞がるのは！－！」

先の戦闘にてノーマ・アースクエイクが魔力暴発で跳ね返されてから既に三日が経っていた。しかし、エドワード・ヴァレンタインの苛立ちが消えることはなかつた。

「くそつ！ 僕が今まで積み重ねてきたのは何だつたんだ！」

「エド……」そんな彼に落ち着いた声がかけられる。

「レミィ、止めんなよ……」エドワードは訓練所の入口に寄り掛かるレミコア・オルザナドウに告げる。

「……無意味」レミコアはただそれだけを言つ。

戦技無双、『白銀の戦闘師』と言われたエドワードにとつて、こんな訓練は確かに全くの無意味。むしろ魔力を消費する点から悪影響しか与えていない。

「俺だつて……こんな事しても意味ねえのは分つてるや」  
だが、雷を走らせ、風で薙ぎ払い、冷氣で凍てつかせ、岩で打ち砕く……そうこうした事はエドワードの苛立ちを幾分かは無くしてくれた。

「だけどよ、いつでもしないと慣れちまいそつだ」最強と言われたエドワードにとつて、自らの魔術、それも最高レベルの精靈魔術が魔力暴発で跳ね返されるなどあつてはならないのだ。

「……事実は事実」対するレミリアは淡々と告げる。長年の付き合いから、レミリアはエドワードのプライドの高さを知つてゐる。自らの魔術の鍛練に関しては人一倍努力をしていたエドワードは、いつしか自分の魔術に絶対の自信を持つようになつてゐた。彼がSSTARANKに上がつてから彼の魔術に対抗出来た者は一人もいない。その事もあり、今回の件はショックが大きかったのだ。

「……分かつたよ、止めりや いいんだる」エドワードは手に持つ壊滅の神槍を床に突き刺すとレミリアに向き合つ。

「んで? わざわざここに呼びに来た理由は何だ?」

「……国王が呼んでる」

エドワードは、レミリアが何かをしている自分に声をかけるのは何か用がある時だけだと知つていた。

「クソジジイが。何考えてやがる」些か以上に無礼な発言だが、いつも事なのでエドワードもレミリアも気にしなかつた。

（国王の間）

「ヴァレンタインよ、氣を鎮めよ」Hドワードが国王、ブライア・グレンダインの前に立つた途端に言われる。

『開口一番それかよ』心の中で忌ましおに咳く。こんな時、このお節介なブライアを厄介に感じるHドワードであった。

「別に気が立つてる訳じゃねえよ」

不快感を隠しもせずに返答する。もし、一般兵士とさがこんな態度をとれば、無礼千万で即退出させられるだろう。

「…………まあ、よい。して、わざわざ呼んだのはお前に使いを頼みたいからだ」ブライアはため息混じりに続ける。手には手紙を持っている。

「んなもん、別の奴に行かせりやいいだる」Hドワードはかつたるそうに答えた。つまりは、Hドワードに使者になれと言つのだ。少なくとも、国軍最強と言われる魔術師に与える仕事ではない。

「相手は、Hーリン・ラグラドルだ。お前でないと相手ができる」ブライアは肩を竦めながら告げる。

「エーリンかよ。…………面倒だな」Hドワードは古い戦友の事を考えながら呟く。

『確かに、あれの相手は俺かレミィにしかできないな』

「しゃあねえな…………行きやあいいんだろ」HドワードはHマーのカードを取り出すと国王から手紙を受け取った。

“風よ、我が存在をその流れに委ね転移をせよー。”

カードに魔力を込めながら詠唱し、空の力を秘めたものに変換していく。

「行くぜ……エアー！」

## 【空】

使い慣れたカードの魔力に包まれながら、エドワードは座標転移の魔術を発動させた。

（王國軍西方基地）

エドワードが到着しても、珍しいことになんの大声も放たれなかつた。

「また人払いしてんのか」エドワードは呆れたように呟く。エドワードの友人、エーリン・ラグラドルは本人はうるさいが周囲が騒がしいのを嫌う奇抜な人間であった。そのため、今現在エドワードの周りには人っ子一人もおらず、シンとしていた。

エドワードはエーリンのいる（はずである）西方基地隊長室前に着くなり大声で言った。

「おい！ エーリン、開けひー！」

「…………」

沈黙。エドワードの声は反響し、廊下にワンワンと響いた。

「…………いるのは分かつてんだ。後三秒で開けなかつたら扉を破壊するぞ。…………」一方的に要求を突き付けるエドワード。

次の瞬間、部屋の中が急に騒がしくなり、バタバタいいだした。

「…………」ゆっくりとカウントする。腰に提げたカード容れから一枚取り出し構える。

その間も部屋の中はバタバタいい、更にバタバタが近づいてくる。

「そ…………」

「あ、ちょっと待った！」エドワードが『||』と言ご終える前に扉は音を立てて開いた。

「捕らえよ、チエイン」唐突に別の言葉を発するエドワード。

### 【鎖】チエイン

構えたカード、チエインを通した魔力は鋼の鎖と姿を変えて、エドワードの目の前の女を縛り上げた。

「ち、ちょっとタンマ！ 無声詠唱なんて卑怯よ……」鎖に縛られた動きを封じられた女は声を張り上げる。

「つるせえよ。だったら出会い頭に逃げるような真似はもうしない事だな、エーリン」エドワードは自らの仕留めた獲物、もとい訪問の対象であるエーリン・ラグラドルを眺めながら言つ。

「逃げないよ。ただ、アンタがわざわざアタイに会つに来るなんて、どうせ面倒な仕事なんだろ？」

些か異常なテンションでエドワードにまくし立てるエーリン。しかし、これが彼女の素の姿なのだ。昔からの付き合いであるエドワードは『アタイ』という一人称にも、奇妙なテンションにも慣れていた。

「知るか。ジジイ直々に渡されたしな」エドワードは懐から手紙を取り出す。

「アンタは戦友がどんな仕事する事になるのか、とか聞こいつと思わなかつたのかい？」つまらなそつにエーリンは手紙を受け取り、封を切る。

「…………」

エーリンの視線が手紙の下へ行けば行くほど、眉は寄りしかめつ

つらへと変わつていく。

「そんなに面白い内容だったか？」 ハーリンの眼が手紙から離れたところで尋ねた。

「意味分かんない。なんでブライトさんはんな命令を……」 ハーリンは呆然としながら呟く。

「……？ 何が書いてあつたんだよ？」 ハーリンの不可解な反応にハドワードまでが眉をひそめる。ハーリンは黙つて手紙をハドワードに渡した。

（） 西方基地隊長エーリン・ラグラドル

（前略）

汝にイルムドア山に住み処を設けるドラゴンの討伐を命ずる。なお、ハドワード・ヴァレンタインを必要に応じて同行させることを許可する。

（後略）

ブライト・グレンダイン （）

手紙にはそう書かれていた。ちなみに、略の部分はいろいろと面白い事が書かれている。ハドワードはその全てを流し読みしていた。「…………あのクソジジイは何考えてやがる」 ハドワードは完全に呆れて呟く。

その命令が今でなければ一人とも納得できた。しかし、今は戦時である。龍との戦いで命を落としても不思議はないにも関わらず、何故このような命令をだすのか。それが解せない二人であった。

「俺らで軽くいなせるよつた雑魚だつたらわざわざ俺達に行かせないしな」 ハドワードは考察を始める。王国でも屈指の魔術師と言わる一人に討伐の命を出すという事は相当な強敵であるはずである。そんな相手をわざわざ戦時にやらせるのか全く分からなかつた。

「任務期間は一週間。山は王国と皇国の境。しかも龍は十中八九強敵、と」

「ついにボケたか?」エーリンは肩を竦める。

「任務開始は一週間後、こつから洞窟までは一飛び。場所は……」

「ヒラリー平原のすぐ近く、か」読み上げるエドワードに続ける。

「案外アンタと引き分けた魔術師とバッタリ遭遇するかも」エーリンは笑いながら言う。その言葉にピクリとエドワードが反応する。

「そうなつたら、そうなつた時さ。そう簡単にやられはしない」目を閉じながら力強く言う。他でもない自分自身に。

「ほーほー、頼もしいな。じゃ、アタイは観戦といきますか」エーリンは軽く笑つた。

そして、エドワードと引き分けた相手に会つてみたいと思つた。

王国最強の魔術師で冷静沈着、泣く子も黙る白銀の戦闘師。そんな彼をここまで熱くさせた魔術師を見てみたいと。

File · II 「奇怪な令」

著者：ユナ・アサクラ

## File · II 「奇怪な令」（後書き）

間が空きましたがFile · IIです。とりあえず、次回に主要キャラの説明を入れるつもりです。まだ世界観とかキャラ設定とか曖昧なままでですがそこでいろいろと説明するつもりです。更新は相変わらず遅いですができるだけ早くやれるようになりますので、今後も応援よろしくお願いします。感想や評価も大募集です！

（皇国軍・一般寮）

医務室の薬の匂いから解放されたレイ・クランドリオンは、寮の自分のベッドに寝転がっていた。もともと、魔力の莫大消費により入院していたため、目覚めてすぐに帰る事ができた。

「……ねえ、レビイ」レイは自らの剣を愛称で呼ぶ。レー・ヴァティンの名前が長いという事で付けた名であった。

「なんだー？」気の抜けたような返事が返ってくる。レー・ヴァティンはレー・ヴァティンでレイが眠っていた間は相当暇だった訳であり、やる気がそげ落ちていた。

「僕の魔力つて、皇帝とかツカサ将軍が言う程強いもんなの？ パティはそんな感じじやなかつたけど」医務室での会話を思い出しながら尋ねる。

「……ああ、そうだ。じゃなけりや、俺にかけられた封印を解いて契約なんかできしねえ」レー・ヴァティンは素直に答える。しかし、些か口調が重くなっている。

「なんで、今まで黙つてたの？」レイは率直に疑問を口にする。

「……お前がそれだけの力を持つてゐて知られたら間違いなく利用されるからな。俺の存在込みで」苦々しげに咳くレー・ヴァティン。と言つても、顔がある訳ではなく、声に表れているだけだ。

「まあ、そうかもだけどさ」レイは静かに頷いた。レー・ヴァティンが自らを心配してくれるのに嬉しさを感じていた。

「最初に言つただろ。『力に溺れるな、自分を常に見続ける』って」レー・ヴァティンはレイと契約した時を思い出しながら言つ。

（一ヶ月前）

「俺は封印の魔剣・レー・ヴァ・テイン。よろしくな、レイ」契約を終え、改めて挨拶するレー・ヴァ・テイン。

「…………」レイは手に持つ質素な剣を眺める。柄から長い縄が伸びているだけで何の変哲も無い片手剣だった。

「ん？」どうした？「レイは何の返答も返さない。

「…………えっと、それがレー・ヴァ・テインの素なの？」

「どうゆうひじぢや？」レイの言葉が理解できないレー・ヴァ・テイン。「いや、だからさ、さっきの契約の時と大分感じがたがうな、つて」レイは小さく呟つ。レイとしては『封印の魔剣』なんて仰々しい名前のついた剣であるため、もつと堅苦しいのかと思っていた

「ああ、ありやあただの形式的な台詞だ。元々、俺は堅苦しいの苦手だしな」

「…………」あまりに軽いレー・ヴァ・テインの言葉に些か気が抜けた。契約の詞じゆはまるで、天壤から響く神の声の如き威厳をもつていた。

「…………だけどな」唐突にレー・ヴァ・テインが言葉を発する。

「…………？」レイは何となく背筋を伸ばす。今の言葉は今までと違ひ、重みが込められていた。

「…………レイ、お前は力を手に入れた。だけどな、力に溺れるな。自分を常に見続ける」

「…………うん」レイは静かに頷いた。その眼には確かな光が宿っていた。

（一ヶ月後（現在））

「うん、そんな事、確かに言われたね」レイも一ヶ月前の記憶を掘り起こしながら肯首する。

「いつかはこうなるって分かってたさ。だが、俺はお前が戦争とはいえ、殺人のために利用されるのが嫌なんだ」レー・ヴァ・テインは重々しく呟く。そこには嘘も偽りも無い事をレイは感じていた。

「…………ありがとね、レー・ヴァ・テイン。心配してくれて」レイは自然にその言葉を使っていた。

「…………お前のジイさんにもそういう言われたな」レー・ヴァ・テインは懐かしそうに呟いた。

「えっ？ 僕のジイちゃんに？」

「ああ、ルーファウスにこんな感じの話をした時も言われたな」レイの驚いたような言葉を肯定する。

「まあ、相棒の事を気にかけるのは当然だ。気にすんな」レー・ヴァ・テインはぶつきらぼつと言つた。

レイが何と返そつか考へていると部屋の戸が叩かれる。ノックの音が部屋の中に響き渡つた。

「開いてますよ～」レイはレー・ヴァ・テインを置いて扉を見つめる。

「お兄ちゃん…………今、暇？」扉が開かれパトリシアが入つてくる。

「パティ、どうしたの？」レイはベッドから降りる。

「あ、別に私に用があるんじゃなくて、ツカサさんがお兄ちゃんの事呼んで来てつて頼まれただけだから」パティは付け加えるように言った。

「ツカサさんが？ ありがと、パティ」レイはレー・ヴァ・テインを鞘に納めて背中に吊す。

「戦技訓練所で待つてるらしいわ」パトリシアは机へ手を伸ばすレイに言つ。

「うん。分かつたよ」レイは使う事ができる魔術カードを腰のカードケースにしまい、扉に向かう。いかなる時、誰に呼ばれた場合であらうと、装備を整えるのは常識であった。

「お兄ちゃん…………気をつけてよ」パトリシアはすれ違い際にそう告げた。

### （戦技訓練所）

レイが戦技訓練所に着いた時には、ツカサは既にそこで待っていた。呼び出したのはツカサなのであるから当然と言えば当然である。「ツカサさん、お待たせしました」レイは頭を下げながら訓練所に入る。

「やあ、レイ君。呼び出したりしてすまないね」ツカサは優しく微笑みレイに向き合った。

ツカサの横では刀身十センチほどの大剣が深々と床に突き刺さっていた。レイは、ツカサが凄腕の大剣使いだと思い出していた。「それで、僕に用つて何でしょつか?」レイは微笑みを崩さないツカサに尋ねる。

「父上…………つまり皇帝と君のお祖父さん、ルーファウスさんに頼まれたんだ」ツカサは優しい口調でレイに言つ。

「君を…………育て上げ、強さを身につけるように、ね」

一瞬、かなりの量の思考がレイの頭を支配した。まず、ツカサが皇帝の息子である事を思い出した。次に、ルーファウスが皇帝やツカサの友人だと言つていた事が頭を過ぎった。そして、自分を鍛えるとはどういう事なのか、と考えが至つた。

「えつ…………?」ようやく搾り出した言葉はそれだった。

「簡単に言つなら、私が君の戦技教官を担当するつて事だよ」

レイは訳が分からなかつた。レイ自身の魔術師ランクはBB+であり、まだAランクですらない。そんな自分に何故SS+のツカサを戦技教官としてつけるのか。

「で、ですが！ 僕はまだAランクにも満たない中級魔術師です！」

「言つたろう。君はオーバーSほどの能力、実力を持つていると。でなければエドワード・ヴァレンタインの精靈魔術を跳ね返すなんて不可能なんだから」 レイの反論を全く受け付けないツカサ。

「それは……きっと何かの間違いです」 レイは驚きと混乱から弱々しく咳く。

「…………なら、試してみるかい？」

「えつ？」 ツカサの言葉がまた一瞬理解できなかつた。

「私が君と手合わせする。ただし、本気でだよ。レイ君が一撃でも私に通す事ができたら君は本物だ」 ツカサは大剣に手をかけながら言う。その目には嘘も冗談も無かつた。

「…………分かりました」 レイは、ツカサが始めからそのつもりだった事に気付いていた。わざわざ戦技訓練所に呼び出した理由がそれであると。

「君が勝つたら訓練を受けてもらいつよ。負けたら好きにしていい。レーヴァテイン、君は口出し無用だよ」 ツカサは大剣を引き抜きながら言つた。レイが力を抜く可能性など微塵も無いと考えているようだつた。

「ああ。俺もレイも本気で行くさ」 レイの手の中でレーヴァテインが告げる。

「じゃあ……開始！」 ツカサは大剣を引きずるよつに構える。

「行くよ、レビー！」 レイは軽くレーヴァテインを握る。

「はあっ！」 レイは軽い構えでツカサに切り掛かる。鋭い横薙ぎの剣戟はいともたやすくツカサに止められる。

“雷よ、その輝ける刃を轟かせよ！”

腰からカードを一枚引き抜き、高速で詠唱する。その隙にツカサはレイから間合いをとる。

「雑ざざ扱え、サンダー！」レイの声と共にカードを通った魔力は轟く雷鳴へと姿を変える。

### 【雷】サンダー

眩ゆい閃光が走り、高電圧の塊が一瞬でツカサに迫る。

「…………はっ！」ツカサは体重を巧みに移動させ、大剣を薙ぐ。運動エネルギーを秘めた大剣は稻妻にぶつかると一瞬で霧散させた。

「えっ！？」レイは驚いて間合いを確保する。何の反応もなく、魔術を一瞬で消し去ったのに驚きを隠せなかつた。

「今度は、じつちから行くよ」ツカサは懐からカードを取り出す。

“樹<sup>き</sup>よ、汝の身体を戒めの鎖とせよ…”

「捕らえよ、ウッド！」ツカサの魔術が発動し、展開していた魔力が変換される。

### 【樹】ウッド

おおい茂る頑丈な薦があらわれ、レイを縛り上げようと一瞬で迫る。

『剣だと斬る前に搦め捕られるな』レイは自然に的確な判断をしてカードを引き抜く。

『炎よ、汝の姿はわが心。我が前に紅蓮の広がりを呼び起こせ！』

レイは声を出さずに心中で詠唱する。すなわち詠唱無用の『無声詠唱』である。

「いけっ、ファイア！」

## 【炎】

刹那、レーヴァテインを媒介に紅蓮の魔術を発動させる。カードから広がった業火が薦に絡み付き、一瞬で消し炭に変化させる。

「四属性魔術を無声詠唱！？」ツカサは驚愕を隠し切れなかつた。そして確信した。レイの力が本物であると。

「はあ！」レイはレーヴァテインを深く構えるとカードを一枚添える。

「<sup>ダブルマジック</sup>二重魔術！！」魔力を展開し、レーヴァテインで誘導して魔術を発動させる。

“水よ、我が心の煌きと共に、<sup>ウェンディーネ</sup>精靈の名の下に、生命の清流を溢れ出させ……”

莫大な魔力が展開されカードを通り変換されていく。

「まずい、ね。レイ君本気だ」ツカサは軽く微笑むとカードを構える。  
「<sup>ダブルマジック</sup>二重魔術……」

“炎よ、その輝きは精靈サラマンダーの御下にあり。神の如きその輝きをもつて、森羅万象を焼き尽くせ！”

“その清き流れで万物を葬り去れ！”

ありえないほどの力を秘めた二つの詠唱がこだまする。レイが先に詠んでいた分に追い付くため、ツカサは失敗のリスクを負いつつも早口で詠唱した。

「碎いて！ ウェンディーヌ・スプラッシュ！」「燃える！ サラマンドラ・ブレイズ！！」

【<sup>ウェンディーヌ・スプラッシュ</sup>精靈水】

一つの精霊魔術が真っ向からぶつかり合つ。陰の性質を持つたレイの水、陽の性質を持つたツカサの炎。一つは力が均衡であつたため、互いに中和し魔力相殺を引き起こした。

「うわっ！」

「くっ！」

二人は踏ん張りながら、相殺の際に生じた衝撃波を受け流す。相殺した魔術の規模が半端ではなかつたため、発生した衝撃波も相当な力を持つていた。

「これが……魔力相殺」レイは静かに咳く。ランクの低いレイは白兵戦などほとんどしておらず、今まで魔術をぶつけ合う事など全くなかった。故に魔力相殺を見るのはこれが始めてだつた。

「さあ、どんどん行くよ」ツカサは大剣を構えると微笑む。

「くっ！ 出せる力は、全部出す！」レイはレー・ヴァテインを握り直すと、ツカサに切り掛かつた。

File III 「模擬戦闘」

著者：ユナ・アサクラ

File·キャラ設定

【レイ・グランドリオン】 属性：炎

漆黒の髪と瞳を持つ、心優しき青年。封印の魔剣・レーヴァティンを操る皇国軍のBB+魔術師。炎属性を得意とし、ランクを遙かに上回る最強クラスの魔術カードを軽々と操る。

父親と母親を戦争で亡くしており、幼少時から祖父のルーファウス・グランドリオンに育てられる。レーヴァティンはそのルーファウスから受け継ぐ。パトリシア・グランドリオンとは従兄妹同士の間柄。

【パトリシア・グランドリオン】 属性：風

レイの従兄妹。レイよりも年下であるが、戦争には長く参加しているため、戦闘技術などはパトリシアの方が上。愛称、パティ。兄思いだが素直ではなく、不器用との評判。

無限に展開される秘宝、三種の神器・ハ咫鏡を操り、多彩な魔術攻撃を用いる。隊長クラスの権限。ランクSで、強力な属性魔術も操ることができえる。

【ツカラ・オルディラン】 属性：地

皇国軍最強、と謳われるSSランク+の魔術師。ありとあらゆる魔術を多彩に操り、どんな苦境をも引っくり返すと言われる強力な戦闘の達人。穏やかな性格で、皇帝のリオファネス・オルディランの養子。

自分の背丈よりも巨大な大剣を操り、素早い身のこなしと幾重にもわたる魔術で戦闘を進める。王国軍最強のエドワードと直接手合させしたことはまだない。

（西方基地）

「有給バンザーイ！」基地の隊長室に甲高い声が響き渡る。

「普段、ろくすっぽ仕事してねえ奴の言つセリフじゃねえな……」

そんな声に律儀にツッコミを入れるエドワード。声には呆れがふんだんに込められており、対するヒーリンはムツとした表情を作る。

「うつやー。必要最低限の仕事はしてるわ」ヒーリンは拗ねたように顔を背ける。

「最低限、な。さすがに落としたらマズイな、って仕事しかしねえじゃねえか」エドワードはかったるさを隠しもせずに言つ。

普通ならクビになつてもおかしくないヒーリンであるが、その仕事の正確さと戦いの腕から、西方基地隊長を任せられ続けていた。

「固い事言いつこなしね。とつあえずアタイのお陰で西方基地は機能してるんだからさ」

「兵の仕事と労力に支えられてな」ヒーリンの言葉に冷たくツッコミを入れるエドワード。

「な、何さ？ 今日は珍しくツッコミ回つてるけど」ヒーリンはやや引き気味に聞く。普段のエドワードはボケでもツッコミもしない。

「……俺がツッコミ入れなきゃ誰がお前のアホ加減を察めるんだよ」

国王から龍討伐の任務を受けたと同時に、任務開始まで一週間の休みをもらつたエドワードとヒーリンは西方基地でのんびりしていた。

「全く、アンタは昔つからそなんだよ」ヒーリンは腕を組みながら言つ。

「お前も昔からいただからな」対するHドワードは言葉に困る限りの皮肉を込めて言い放つ。

「何? アタイが昔からどうもしないバカで人に迷惑ばつかかけて、そんなアタイにこちこちシッパミ入れてるんだから昔からHドワードが変わらないのは仕方ない、とでも言いたいの!?」落ち着いたHドワードを勢いで押し切るつと体ごと迫るHーリン。

「ああ。まさにその通りだ」Hドワードの方は全く動じずに返す。その淡泊な返答にHーリンは一瞬何と攻めるべきか言葉を失う。「つまりは、お前がおじとやかなり俺は問題無くシッパミの立場を引退である訳だ」

Hドワードは容赦無くトドメの一撃を叩き込む。

「……………」HドワードはHドワードに向か、手を皿にさす。

「今更泣きまねなんて通じねえよ」Hドワードは手をヒラヒラふつて告げる。HドワードとHーリンの漫才では付き物のやつとつだった。

そうして、彼らは休息の時を消費していった。

### （王国西方都市・ベルギウス）

古くなつたマントの新調と靴の修繕のために、王国最西端の都市、ベルギウスを尋ねて来たエドワードとHーリン。ちなみに、Hーリンは消耗品の補給のためにこじてに来ただけである。しかし……

「おっしゃ～ん! 焼きもろこじーつー」

「は～よつ。…………つて隊長じゃねえか。また食べ歩きかこ?」

「こやこや、今日は買い物に付き合つてるだけだよ。ああ、タコ焼きも追加でー」

これはあくまでとあるワーンシーンの抜粋である。この街に来た事で一番樂しんではいるのはエドワードではなく、ましてや他の誰でもなく、エーリンなのであった。

「…………お前、俺のお供だつてマジで理解してるのか？」エドワードは両手に山のような食べ物を抱えるエーリンを眺めながら言ひ。「うん。アタイはここに来る度にこうじう事してるから気にせんでいいよ」エーリンのあっけらかんな返答に頭を抱えるエドワード。

「…………もう何でもいいか」エドワードはエーリンの腕の中から口を抜き取りかじつた。

街の食べ物全てを食べ尽くそつと画策している（ような勢いで食べる）エーリンと一旦別れたエドワードは衣服店で新たな漆黒のマントを買つた。

そして、靴の綻びを塞ぐために靴屋に向かうのであった。

「エーリンの多食らいは相変わらず、か」エドワードは通りを眺める。エーリンが通つた道に並ぶ店の店員は確実に一コ二コしている。それだけ人徳があるのである。

「しかし、あの活気だけでここまで人気が出るか？」エドワードは静かに呟く。エーリンは昔から変わらずにテンションが高いのが売りである事をエドワードは知つていた。

だが、些か腑に落ちない点があった。いくら明るい人間はいえ、今のエーリン程の人気はでないであるつところである。まだ、何かの要素があるはずだと考える。

「だとしたら、何がエーリンの人気を高めてるのか…………」

「引つたくりだつ……」エドワードの思考を裂く大声が突然上がる。エドワードが声のした方を見ると、グラサンにマスクという変態丸出しながたいのいい男が茶色いバッグを抱えて猛ダッシュしていた。

「バカだな。今どき引つたくりなんて袋叩きに合ひただけなのに」エドワードは背中の槍を手にとると一歩踏み出す。

「ん？」しかし、一歩田は出なかつた。引つたくり犯がダッシュする方向は皆が避けているため開けている。そんな中にエーリングが一人、ポツンと立っていた。それを眼の端に捉えたエドワードは足を止めていた。

「どけえ！！ 女ア！！」マスクを通して、囁つた罵声が上げられる。しかし、エーリングはどかなかつた。それどころか、引つたくり犯に向かつて走り出した。

「しゃらくせえ！！」引つたくり犯はエーリングを吹つ飛ばそうと腕を振り上げる。

「つっこひよ、バカ」対するエーリングはそう言い放つと、腰を軽く落とし構える。

バキィイ！！

次の瞬間、男が吹つ飛び、エーリングが着地する。間合いに入つた瞬間、ドラゴンサマーソルトを男の下顎に叩き込んでいた。

「ハアッ！！」着地と同時に飛び上ると腰から武器を取り、構える。

エーリングー エーリングー エーリングー

エーリングの手に握られた小振りの双銃が火を噴く。俯せに倒れる男の顔の真横、左右に三発ずつ、それぞれスレスレの位置に弾丸を放つていた。

「アタイの眼が黒い内には西方じゃ犯罪なんか起させないよ」男の真正面に立ちながら言い放つ。男は完全に失神していた。もっとも、エーリングのどの攻撃で気を失つたのかは分からぬが。

「……なるほどな」エドワードは納得していた。

ヒーリンの正義感の強さは昔から半端ではなかつた。この戦争に参加しているのも、ヒーリンの周りにいる人間を守るため、と言つていたのをエドワードは思い出していた。

「あんだけの事してりや、一般人には好かれるだらうな」エドワードは小さく笑みを浮かべた。まつとうに生きている人間には好かれ、闇に塗れる人間には疎まれる。

「ヒーリンらしいな」

「エドー！ こいつ、連行すんの手伝つて！」いつからエドワードに気付いていたのか、大声で呼ぶヒーリン。どこから出したのか、男はロープで縛られていた。

「しゃあねえな」エドワードはグングニルを背負い直すと、ヒーリンの下に向かう。

「どこに連行したらいい？」ヒーリンはロープを片手で握りながら尋ねる。

「お前な、自分が西方基地の隊長だつて知つて聞いてんのか？」エドワードは溜め息混じりに聞き返した。各基地はその周辺の事全般を請け負つていて、それは、無論犯罪に関しても然りであった。

「だつて面倒だし」

「どうせお前は何の仕事もしねえだろ。つーか、お前が仕事してるのは見た事ねえぞ」ヒーリンの反論、もといわがままを弾き返すエドワード。

エドワードは一枚の魔術カードを取り出すと、魔力を展開する。「今日はもう帰るぞ。エラーのカードで転送してやるから」エドワードはヒーリンの手からロープをとると詠唱始めた。

“空よ、我が存在をその流れに委ね転移させよー。”

「仕様がないか。エド相手にロード敵つはずないし」 ハーリンはやれやれと肩を竦める。

「飛ぶぞ……」 ハードワードはハーリンに対するシビリ

を全て我慢し、一陣の風を呼び起しす。

### 【エ】

次の瞬間にはベルギウスからエドワードとハーリン、引いたくり犯の姿は消え去っていた。ちなみに、エドワードが靴の修繕を忘れていた事を思い出したのは男を牢に繋いで隊長室に戻った後の事だった。

「File · III 「有給休暇」

著者：ユナ・アサクラ

### 【エドワード・ヴァレンタイン】 属性：水

王国軍に属するSSSランクの魔術師。白銀の瞳と長髪を持ち、王国最強とされる。その鬼神の如き戦いぶりを形容されて『白銀の戦闘師』、『エース オブ ザ カード』などと呼ばれる。

壊滅の神槍・グングニルを操り、最強クラスの魔術カードを次々と使用する。どんな悪環境でも戦闘を勝利へと導く守護神。負け無しと有名。しかし、心の底では……

### 【レミリア・オルザナドウ】 属性：地

王国軍の魔術師で、エドワードとよくペアになる。無口で無表情。故に、付き合いの長いエドワードかエーリンでないと考えが読めない。人殺しは嫌いなので、戦闘の際は寸止めを心がけている。

無限の短刀・ゾーリンシェイブを操り、遠距離、近距離、両方の魔術を操る。短刀そのもののリーチの短さをカバーできるよう、投げナイフがかなりうまい。ちなみに、戦闘能力はエーリンよりも上。

### 【エーリン・ラグラドル】 属性：炎

王国軍にて、西方基地の隊長。まがつた事が嫌いで、正義の味方を自負する。一人称はアタイと変なもので、テンションも女の事は思えない。エドワードよりも年上だが、舐められまくっている。

双銃を操り、魔術よりは体術などで戦闘を進める。AAAランク+なので、そこそこに強力な魔術を扱う事もできる。戦闘そのものにはあまり参加しないが、かなりの戦闘能力を持つ。

今回は 、ともにキャラ設定をあとがきに入れました。ネタばかりはないので裏設定程度に読んでおいてください。次回は世界観などの設定をいれるつもりです。

魂喰に比べると、投稿ペースがかなり遅いですが、温かい目で見守つて頂けると嬉しいです。感想＆評価も募集中！どんどん書き込んでください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5494c/>

---

闘争の渦【長期休載中】

2010年10月10日21時50分発行